# 書　　評

## 大淵寛・岡田実・加藤寿延・森岡仁著『人口経済論』

新評論，1977年6月，318ページ

人口論が学際的でなければならないということは誰しも否定しない．しかし，われわれ経済学を背景にもつ人口研究者にとって，人口と経済との関係が思考の中心に置かれることは当然である．そればかりではなく，少くとも近代社会においては，人口は経済の発展によって強く影響されて変動し，また人口は経済に対して少なからぬ影響力をもった．その意味において，人口経済論が人口論の基盤になることは十分にその客観的根拠を有すると言うべきである．

ところで人口経済論とは何か．その方法と課題は何か．とりわけわれわれが現代において当面しつつある課題を意識して人口経済論が書かれた場合，どのような労作ができ上るのか．

本書はこれらの問いに答えてくれる好著である．構成としては，人口経済論とは何かという一般的枠組を明らかにする序章につづいて，第Ⅰ部人口の歴史と学説，第Ⅱ部人口理論，第Ⅲ部人口問題，第Ⅳ部人口政策となっており，カバーされるべき全分野がバランスよく取り扱われている．

第Ⅰ部では，最近急速に業績を挙げ始めた歴史人口学の成果にも触れながら人口史を概観し，つづいてマルサス，マルクスの人口思想と19世紀末以降の出産減退期の人口思想が要領よく述べられている．

第Ⅱ部では，ある意味で第Ⅰ部の学説史の叙述を引き継いで人口理論の展開が試みられている．ここでの内容は人口学説あるいは人口思想というより，より理論的であり，また紹介されている理論は古典的なものだけではなく，戦後に発達した新しい理論も含まれている．いわゆる人口転換理論，出生力の経済理論，人口効果の理論，適度人口理論にそれぞれ1章が割り当てられており，付論として形式人口学の主要概念の説明が補足されているのも便利である．

第Ⅲ部では人口問題を経済発展段階別あるいは経済体制別に取り扱うという有益な工夫が試みられている．確かに一口に人口問題といってもその性格は大いに異なるものがあるのは当然であって，ここで行なわれているような取り扱い方をしなければ，叙述は一般的，抽象的なものに終らざるをえないであろう．ここでは先進工業国，日本，低開発国，社会主義国の人口問題の説明にそれぞれ1章がさかれている．ここでの説明によって，人口の側面からみて現代がいかに多様な時代であるかという事実をよく理解することができる．

最後に第Ⅳ部は人口政策を取り扱っている．本書の他の部でもしばしば触れられているように，現代は世界人口の爆発的増加を背景に危機的人口問題が提起されている時代でありながら，その解決については種々の理由のゆえに未だに目途をつけ難いという状況にある．人口政策とは何か．その目標と手段，人口政策の歴史，経済計画と人口政策の関係，これらの論点について考えることは，たんに知的関心の対象として重要であるばかりでなく，現代において実践的に緊要な論点であると言える．第Ⅳ部ではこうした現代の要求に答えるべく十分に配慮された叙述がなされている．

人口経済論の守備範囲は広いし，問題点への接近方法は多様でありうる．幸いにも本書は南亮三郎先生の門下生4人によって共同執筆され，そのおかげで共著とは思われない見事なまとまりを示している．本文の叙述だけではなく，章末に掲げられている多数の文献目録もきわめて有用である．

最後に一点筆者の注文をのべることが許されるとすれば，将来，著者達が人口経済論の質的側面に一段と注意を払われることを望みたいと思う．経済量の増大が生活の質の向上と必ずしも一致しないことは現代人口論において見逃すことができない点だからである．

（岡崎　陽一）